



『学問のすゝめ』出版150年

「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」という有名な一節から始まる『学問のすゝめ』は福澤諭吉の代表的な著作で、明治初期のベストセラーでもある。その「初編」の発行は1872年であり、今年でちょうど150年。そこで『学問のすゝめ』刊行の経緯と意義、当時の反響などについて振り返ってみたい。

学校向け小冊子から始まる『学問のすゝめ』の成り立ち

『学問のすゝめ』は当初から一冊の書物としてまとめる構想で著述されたわけではなかったようだ。もともとは明治5（1872）年2月から同9（1876）年11月にわたって断続的に出版された17の小冊子で、同13（1880）年7月に福澤自ら合本し、一冊にまとめたものが現代



『学問のすゝめ 全』と題された「初編」初版本
(福澤研究センター提供)

の私たちが知る『学問のすゝめ』である。同4（1871）年、福澤は郷里の中津（現・

大分県中津市）に英学校設立を勧め、同年11月に中津市学校が開設された。『学問のすゝめ』は、福澤がこの市学校で学ぶ青年に向けて新しい学問の在り方を説いた読本だった。題箋（書名を記した短冊状の用紙）は『学問のすゝめ 全』となっており、当初は続編を出す意図はなかったと考えられている。しかし、新しい時代の幕開けを高らかに宣言したその内容が世間で大きな反響を呼び、およそ2年後には続編の「二編」が刊行されることになった。その時点で『学問のすゝめ 全』は「初編」と位置付けられた。福澤自身、合本の序文で「読書の余暇随時に記すところ」を発表したもので、「前後の論脈相通ぜざるに似たるものあるを覺」えると述べてい



執筆当時の福澤諭吉
(福澤研究センター提供)

る。しかし当時の読者はそこに国民一人一人の「独立の気力」を奮い立たせる明確なメッセージを読み取っていた。福澤が誰にでも読みやすいようにと平易な文章を心がけたこともあり、小学校の読本としても利用され、『学問のすゝめ』で学んだ青少年たちが、やがて近代化を進める日本の国づくりを支えていくことになった。

外国書思想を咀嚼して 歯切れの良い日本語で表現

『学問のすゝめ』の成立を検討していく上で見逃せないのは、さまざまな外国書の影響である。例えば、八編にはフランシス・ウェーランドの『修身論』が引用されるほか、各



中津市学校初代校長を務めた小幡篤次郎。

「初編」は福澤と小幡の連名になっている（三田メディアセンター提供）

編にもウェーランドを下地にした叙述が散見される。また、十四編にはベンジャミン・フランクリンの名が挙げられ、十五編にはジョン・スチュワート・ミルの『婦人論』が引用されるなど、随所に外国書の影響が感じられる。初編冒頭の「天は人の上に人を造らず……」に関しても、アメリカ独立宣言やジョン・ヘル・バートンの『ポリティカル・エコノミー』を經由して福澤が学んだ「天赋人權」の思想の表明で、独立宣言の中にある「All men are created equal」がその「原文」ではないかともいわれている。

しかし『学問のすゝめ』は決して西欧思想の単なる翻訳紹介ではない。数々の外国書に書かれた思想を福澤自身が十分咀嚼した上で、時代の変革期にある日本の読者に向けて歯切れの良い日本語で投げかけた独自のメッセージとなっている。150年たった今も、多くの日本人が「天は人の上に人を造らず……」を口ずさんでいるという事実が、そのことを証明しているのではないだろうか。

また今日、『学問のすゝめ』は英語だけでなく、中国語、フランス語、

韓国語、タイ語、インドネシア語、モンゴル語などの翻訳本も刊行され、世界に感銘を与えている。

ベストセラーゆえに「偽版本」に悩まされる

では、明治の大ベストセ

ラー『学問のすゝめ』はどれくらい売れたのだろうか？ 合本の刊行年（1880年）に福澤自身が試算したところ「凡そ70万冊」が発刊され、「初編」だけでも偽版本含め「22万冊」を数えたという。当時、日本の人口は約3500万人で、読書人口も少なかった時代であることを考えると、これは驚異的な数字といえる。

『学問のすゝめ』の評判に伴って、全国各地で「偽版本」も多く作られた。当時の日本にはまだ著作権の概念がなかったため、これには福澤も大いに頭を悩ませていた。実は福澤自身が慶応3（1867）年に『西洋事情』で著作権を「コピーライト（copyright）」として紹介しており、『学問のすゝめ』を執筆している頃から、著作権当事者として明治政府に出版条例の厳正な適用などをねば



東京日日新聞860号掲載『学問のすゝめ』七編の風刺画（三田メディアセンター提供）

り強く求め続けた。その結果、明治8（1875）年の出版条例に「版權」の語が織り込まれ、ようやくわが国にも著作権の概念が広く知られていくことになる。

「偽版本」が出るほど『学問のすゝめ』がポピュラリティを獲得した要因の一つは、福澤の平易で歯切れの良い文章だった。今は気軽に読める「現代語訳」も複数刊行されている。出版150年をきっかけに、あらためて「現代語訳」版と共に原文に親しみ、明治の息吹を感じてみてはいかがだろうか。

